

<講演>芭蕉の「わぶ」についての考察

日暮, 聖

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

81

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

11

(発行年 / Year)

2010-03

〈講演〉

芭蕉の「わぶ」についての考察

今日は芭蕉についてお話しします。私の研究は西鶴の小説論のようなどころから始まっているんですが、十五年ぐらい前から、徳川時代に始まった貨幣経済社会の問題を、自分の中に設定しました。

それにより善悪の価値観が変わり、商人が翻弄されているというのが江戸時代であると思っただけです。その視点―貨幣の問題で文学の論文を書くということとはそれまでほとんどなかったのですけれど、そういう視点で読んでみますと、例えば、近松門左衛門の『女殺油地獄』という作品があるんですが、この作品は不条理劇―要するにわけのわからない、道理の追求できない劇としてとらえられており、親しくしていた年上の女性をお金のために殺すという作品なので、与兵衛の非道な人間性を非難するという批評がされていたんですけど、貨幣経済社会の問題を読み込みますと―ほんのわずかですが、遊びの金を貸し、それを真綿で首をしめるようにして取り立てる人物が出てくる

日暮聖

んです。そのあたりの描写を読みますと、与兵衛は普段は遊び歩いています、義理の父親の真実の心を知って、真人間になろうと思っただけです。ところが、真人間になろうと決心した時にお金を返さなければいけないという事態に落ち入って、遊び歩いているままだったら、殺人は犯さない―本当に真人間になつて親孝行しようと思つたので殺人を犯さざるをえない、そういう構造がうまく書かれています。

それはほんの一例なんですけれど、そういう視点から西鶴とか、近松、上田秋成とかをずっと読んできました。でも、芭蕉に関してはどうしてもわからないでいたんです。貨幣経済社会、その社会状況に対して、芭蕉をどういう風に読んでいけばいいのか、ということがなかなかできなくて、ちよつとあきらめかけて、「詩歌の世界は別かな」という風に思っていたんです。でも、芭蕉の初期の俳文に出会って、考えを進めることができました。延宝八年から九年（天和元）の一年間に芭蕉は立

て続けにいくつかの文章を書くんですが、そこで、「わぶ」という言葉を追求します。貧困の問題とかを意識して、「わぶ」という言葉を概念化しようとしていく試み—と言った方がいいかな、芭蕉にとって、俳諧の中の非常に大事な概念として作り上げていこうとするとところが見えますので、今日はそのお話をしていきたいと思います。

その前に簡単に、芭蕉の出自とか、前提になることとかをお話しようと思いますので、プリントの最初のところに略年譜を上げました。

芭蕉略年譜（甲子吟行／野ざらし紀行の旅に出るまで）

- 一六四四（正保元年） 伊賀上野に生まれる。
- 一六六二（寛文二年・十九歳）

藤堂新七郎家（藤堂藩伊賀付士大将・五千石）に召抱えられたのは、この頃か。

- 一六六六（寛文六年・二十三歳） 蟬吟（藤堂良忠）没す（享年二十五）。
- 一六七二（寛文十二年・二十九歳） 『貝おほひ』を携えて江戸へ下る。
- 一九七七（延宝五年・三十四歳） この頃までに宗匠立机していたもよう。

一六八〇（延宝八年・三十七歳） 冬〜一六八一年冬

四月「桃青門弟独吟二十歌仙」刊

行。

冬 深川へ居を移す。

「柴の戸」「月侘齋」「茅舎の感」「寒夜の辞」「乞食の翁」など二連の句文を立て続けにあらわす。

一六八三（天和三年・四十歳）

『虚栗』に「跋文」を書く。

一六八四（貞享元年・四十一歳）

「野ざらし紀行」の旅に出る。尾張で『冬の日』五歌仙を巻く。

芭蕉は、一六四四年に伊賀上野で生まれ、五十一歳で亡くなりました。松尾家はよく無足人階級だったと出てくるのですが、これは給料がなく、侍身分の最後に名前が連ねられるという階層です。藤堂藩などいくつかの藩で設けている身分ですが、無足人だったのは松尾の本家なんで、柘植が本家のある地なのですが、芭蕉の父親はその末流でした。伊賀上野というのは城下町ですので、流浪の民みたいなものではなかったかと思うんです。食べられなくて、伊賀上野の城下町に出てきたというようなことではないかと思えます。で、お兄さんは結局、半端仕事みたいなことをしていて、あと姉もいるし、妹もいるし、という立場なんです。芭蕉は借金をして実家へ送ったりして、面倒も見ています。

芭蕉は十九歳の時に、藤堂新七郎家に召抱えられる。藤堂藩の伊賀付士大将です。同じ「藤堂」だから間違いないので

すが、藤堂藩の藩主に抱えられたわけではなく、藤堂藩はいくつかの領地を持つていまして、伊賀上野を任されている土大将に召抱えられました。「台所方」とありますので、事務方ということでしょう。これは大変幸運なことで、藤堂良忠に目をつけられ、俳諧の道に入っていくのです。良忠はその家の跡継ぎですので、芭蕉も将来を約束されたといっているでしょう。

ところが、一六六六年、藤堂良忠（蟬吟）が二十五歳で亡くなってしまい、芭蕉は苦境に陥る。芭蕉には侍として暮らしていける可能性がなくなります。そこで、芭蕉は、『貝おほひ』——これは伊賀の俳人の発句合で、芭蕉がどちらがよいか批評を書いたのですが、これを携えて、江戸に下ります。これを江戸で出版して、——これが処女出版なのですが、中は、六方詞とか、かぶき者の言葉とか当時の流行の小唄とかがとりこまれていて、軽快な、遊び心に満ちた俳諧集なんです。江戸を意識して、そこで評判をとろうと下ってきたことが明らかです。

一六七七年、三十四歳の頃までには宗匠立机していたらしいといわれています。先生として俳諧に点を付けるわけですが、それを付けて何文という風に、点料をもらって生活するという形です。そうやって俳諧で食べていくのですが、一方、この頃、神田上水の工事に携わっていたという記録もあります。

一六八〇年四月に『桃青門弟独吟二十歌仙』を刊行します。これは錚々たるお弟子さんたちが名をつらねており、「これで打って出るぞ」という感じなのに、その冬、芭蕉は深川へ隠棲してしまいます。深川へと隅田川を渡りましたが、江戸時代においては、深川はもう都会の中ではないんですね。ここで、江

戸の町で俳諧師としてやっていこうという志を捨てたといえるでしょう。深川へ移ってから一年間ぐらいの間に、芭蕉は「柴の戸」「月侘齋」「茅舎の感」「寒夜の辞」「乞食の翁」というような一連の句文を立て続けに書きました。

それらが今回見ていこうとする文章なのですが、一年間にわたって、これらを書いてきて、そうして、一六八三年、『虚栗』に「跋文」を書きます。ここで一年にわたった「わぶ」という言葉の検討は、一応、収束を見たのではないかと思います。

そのあと、一六八四年に「野ざらし紀行」（甲子吟行）の旅に出て、尾張で『冬の日』の歌仙を巻きます。一般的にはここから蕉風が始まると言われており、今日取り上げるところは、あまり読解などされていない。本格的に蕉風が始まるのは『冬の日』からなんだという認識で、芭蕉の研究が行われているような状態です。

柴の戸（延宝八年冬）

では、「柴の戸」を見て下さい。

こ、のとせの春秋、市中に住侘^{すまむ}て、居を深川のほとりに移す。長安は古来名利の地、空手にして金なきものは行路難しと云^いけむ人のかしこく覚へ待るは、この身のとほしき故にや。

しばの戸にちやをこの葉かくあらし哉

はせを

芭蕉は江戸に出て来て、九年間の春秋を過ごしたのですが、「市中に住侘て」といつています。暮らしがやつぱりなじまなかったんですね。都会生活が自分には向いていない、住むのに苦勞して、嫌々暮らしていて、それで住まいを深川のほとりに移しました。「長安は」のところは、白楽天の「張山人ノ嵩陽二婦ルヲ送ル」の一節「長安ハ古来名利ノ地、空手ニシテ金ナクンバ行路難シ」をそのまま引用しています。つまり、長安という都は「名利の地」だ、名譽欲利欲に満ち溢れている都会で、金のない者が生活していくのは大変難しい。そう言った白楽天の漢詩を賢く思った、芭蕉は共感を覚えたんですね。それは、この身が貧しいせいだろうかということと言っているわけです。非常に赤裸々なことを語っているんです。江戸の生活が自分の身には合わなかった、それは私に金がなかったせいだといっています。

「しほの戸」の句は難解だと言われているんですけども、一応、「しほの戸にちやを」ととらえて、「しほの戸」、隠棲した住まいで茶を飲むような生活というような、中央で俳諧師としてやっていくことから退いた生活を言った、ととらえます。だけれども、眼前には、「この葉」が「あらし」で舞っている。そういう情景をよんだのではないかと思うのですが、従来の注釈ですと、これは、たとえば「貧居ながらも名利の巷を離れて心安らかなため、戸外の風にまで親しみを感ずる自足の生活を言った」というようなとらえ方をされるのです。「わぶ」ということを「風流」、つまり「わび」「さび」の意味でとらえてしまつて、それを再検討しようというような読み方があまりされ

ていません。だから、芭蕉は「貧しい」と言っているのに、それを「清貧な生活」だとか「清らかな貧しさ」だとか、「わび」「さび」の世界に意識してしまうのです。でもそうではなくて、赤裸々に、「貧しさ」を中心にした「わぶ」という言葉を概念化しようとする試みだと、私は考えます。

月侘齋（延宝九年秋）

次に、「月侘齋」という俳文を書きました。

月をわび、身をわび、拙つたきをわびて、わぶと答へむとす
れど、問ふ人もなし。なほわびくつたて、

侘つたてすめ月侘齋つたがなら茶哥

もう「わび」づくしです。月を眺めながら「わぶ」、自分の身の拙さ、運命の拙さを「わび」る。「わぶと答へむと」するけれども、自分には問うてくれる人もいない、なので一層わびわびてしまつて、次の句を詠んだということです。

この「わぶと答へむ」というところで、すぐに在原行平の「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ」という和歌が浮かびます。これは、事にあたつて須磨に蟄居した時に行平が詠んだもので、京都から離れるということは、当時の人にとっては大変な心痛だったでしょうから、失意の心を詠んだ和歌だったわけです。都から追放されてしまつて、失意の心で月を見ながら、自分の運命の拙さをわびる。で、行平の

場合は「問うてくれる人があれば、『こんな風になっていますよ』と答えて下さい」という和歌なんです、それに対して芭蕉は「行平に自身を重ねて、自分も月を見て、『身をわび、拙きをわび』る、でも『自分には問うてくれる人もいない』と、一層わびてしまうと書きました。

句の方ですが、「侘てすめ」、これは謡曲の『松風』にある「わざとわびてこそ住むべけれ」―謡曲は当時、教養として浸透していますので、誰もが知っていた詞章ですが、「わざとわびて生活しなさい」という、その言葉を取っているんですね。で、月を見ながら侘びている私「月侘齋」―これは芭蕉のことで、「なら茶哥」というのは俳諧のことですが、「なら茶」というのは、お米に豆を入れたり、お粥のようにしたりしてのばして食べるものなので、貧しい食事というニュアンスです。その貧しい食事をしながら、俳諧をよんでいく。芭蕉は別のところで「なら茶三石喰ふて後はじめて俳諧の意味をしるべし」ということも言っているんです。つまり質素な食事を三石―ものすごくたくさん質素な食事をして、貧しい暮らしを徹底的にして、初めて俳諧というものがわかるということを言っています。

茅舎の感（天和元年冬）

老杜、茅舎破風の歌あり。坡翁ふた、び此句を侘て、屋漏の句作る。其世の雨をはせを葉にき、て、独寝の草の戸。

芭蕉野分して、盃に雨をきく夜哉

「老杜」というのは杜甫のことで、「茅舎破風の歌」というのは、杜甫の「茅屋秋風ノ破ル所トナル歌」という漢詩を指します。「坡翁」は蘇東坡のことで、これも蘇東坡の「連雨二江漲ル」の一節「牀牀漏ヲ避ク幽人ノ屋」を背景にしています。杜甫の「茅屋秋風ノ破ル所トナル歌」の詩を、蘇東坡が心に感じて、この「連雨二江漲ル」の詩を作った。この漢詩は、家が貧しくて雨が漏ってきましてしまうということなんです、杜甫は詩の最後のところで、破屋が漏ってしまっているので眠れない、だけれども、広い家を手に入れて、貧乏な人たちをそこに覆ってあげて、顔を見合わしたい、そのようなことを言っています。そういう雨にも風にもびくともしない家がそびえたつ、それを見ることのできたなら、私の仮住まいが打ち崩されて凍えてしまったって満足だ、そういうことを杜甫は言っているんです。だから、その心を芭蕉は取り上げた。さらに、自分の住まいは大雨に雨漏りがしてしまうということをよんだ蘇東坡の句に共感を覚える。

「芭蕉野分して盃に雨をきく夜哉」―風で芭蕉の葉がバサバサ鳴っている、野外の風を聞きながら、雨がポタポタ盃に漏っている、その音を聴いている。「盃に雨をきく」というところに俳諧があるんですけれど、まさにこれはわびた心―孤独でつらくて、独り寝の夜、雨の音を聴いているという句です。

芭蕉の「わぶ」についての考察

寒夜の辞（天和元年冬）

深川三またの辺りに草庵を侘て、遠くは土峯の雪をのぞみ、ちかくは万里の船をうかぶ。あさほらけ漕行船のあとのしら浪に、若の枯葉の夢とふく風もや、暮過るほど、月に坐しては空き櫂をかこち、枕によりては薄きふすまを愁ふ。

櫂の声波を打て賜氷る夜や涙

「深川三またの辺りに草庵」というのは、今、芭蕉庵のある、川が三つに分かれているところで、ここは月の名所でもあるのですが、その草庵で芭蕉はわびしく暮らしている。遠く眺めると「土峯の雪」、そして近くには「万里の船」—隅田川の船がありますから、杜甫の漢詩をそのままもってきて、隅田川の風景に重ねているんです。「土峯の雪」「万里の船」というのは、杜甫の「絶句四首其三」の「兩箇黃鸝鳴翠柳／一行白鷺上晴天／窓含西嶺千秋雪／門泊東吳万里船」を背景にしています。杜甫の漢詩に重ねて、芭蕉庵から見た山の風景と船の風景を表しています。

「あさほらけ漕行船のあとのしら浪」というのは、背景に和歌があります。沙弥満誓の詠みました「世の中を何にたとへん朝ほらけ漕ぎ行く舟のあとのしら波」（拾遺和歌集）という和歌があるのですが、これは「無常」の代表歌ともいわれている歌です。「和漢朗詠集」の中では「無常」の中に収められています。また大系本の注によれば、源順が四歳の女の子を亡くし、

そしてすぐ五歳の男の子を喪ってしまい、それで無常の涙にくれて、和歌を詠むのですが、最初に沙弥満誓の「世の中を何にたとへん」を置いているということなんです。ですので、芭蕉がその和歌を取り上げて、俳文の背景にしたということは、無常感をここに取り込むという意図であったと思うんです。「無常」イコール「わぶ」と言っていると思うのですけれども、その心子どもを喪ったつらさ苦しさとか、そういう感性を受け止めればいいのではないかと思います。

次に、「若の枯葉の夢とふく風」は、西行の歌が背景にあります。「津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり」（新古今和歌集）を背景にしているわけです。この西行の和歌は能因法師の「心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春の景色を」を本歌取りしています。大坂の難波ですが、春、満開の梅が咲き誇るといことで、能因法師は、難波の春、梅の咲く春で和歌を詠んだのですが、それに対して、西行は、「能因が詠んだような津の国の難波の春は夢だったんだらうか」と言うんです。眼前にある、「蘆の枯葉に風吹きわたる」という風景を詠むわけです。枯葉に風が吹き抜けるという冬の無常感。もう一つ、西行の和歌をあげておきました。「津の国の葦の丸屋のさびしさは冬こそわけて訪ふべかりけれ」（山家集）と詠んでいて、春の難波の暖かさではなくて、冬の枯れ枯れとした、その詩情こそ私たちは追求していきましよう—そういう感じかな、そんな詩情の転換みたいなことが西行の和歌でおこなわれていて、この西行の歌を詠む姿勢に芭蕉は共感している、それでここに引かれているんだと思います。

最後の「月に坐しては空き樽をかこち」、これは李白の漢詩からとられています。「將進酒」の「金樽ヲシテ空シク月ニ對セシムルコトナカレ」という、酒を勧める詩の中で使われている言葉をそのままとっています。この漢詩は、最後のところで、「人生の完璧な時は得がたく、また失いやすい」とか「君たちとともに、過ぎ行く命に対する悲しみを酒によって消そう」といったことをよんでいるんですね。そこに芭蕉は共感している。やはり無常感です。人生、永遠に生きられるわけでなし、幸せな時というのは本当にわずかで得がたい、失いやすい、だからこそ、はかない無常の人生に対する悲しみを酒を飲むことによって通り過ぎていこうではないか、そういう感じの漢詩なんです。だから、やっぱり無常感を表すものとして、ここに取上げられています。李白の漢詩が、「酒を飲んで苦しみ、悲しみを消そう」といっているのに対して、芭蕉は「空しき樽」と言っていますので、芭蕉のところでは酒がないんですね。だから、李白が言ったお酒もなくて、自分は薄い布団で寝るしかないといっています。

「樽の声波を打て賜氷る夜や涙」。大変有名な句です。樽のきしる音一隅田川がすぐ目の前ですのでーがして、波がパチャンと船ばたにあたるんでしょうか、それにじっと耳を傾ける、そうすると、孤独といったらいいかー「わび」と言い換えたいのですけれども、そのせいで、はらわたも凍るかと思われて、涙が出てくるという句です。

「わびし」という言葉は、和歌の中でしばしば詠われているわけです。『歌枕歌ことば辞典』（片桐洋一）を引いてみますと、

「現代語の『わびしい』と違って、孤絶した中にどうしようもないつらさを味わっている感じ、つらく悲しく、どうしようもないという気持ち」とあります。先程言いましたように、子供を喪ったとか、母親を喪った時の悲しみとか、在原行平の和歌にありましたように失意の心、それを「わびし」という言葉で表しているわけです。そこにさらに加えて、芭蕉は、貨幣経済社会の中で経験した「貧しさ」、それによって味わった感慨みたいなものを加えているんですね。『古今和歌集』以降でしゅうか、和歌の中で「貧しさ」を詠ったものはないみたいなんです。ですから「柴の戸」にありましたような、白楽天の漢詩「空手ニシテ金ナクンバ行路難シ」を引くといった形で、漢詩に寄り添いながら、貧困の悲哀といったものをよんでいこうとしているわけです。

乞食の翁（天和元年末）

最後に「乞食の翁」です。

まどにはかくむせいせいせんしゆうのゆき
窓 舍 西 嶺 千秋 雪
もんにはかくすとつかいばりのかぬ
門 泊 東 海 万 里 船

泊船堂主 華桃青

我其の句を識て、其心ヲ見ず。その侘をはかりて、其楽をしらず。唯、老杜にまされる物は、独多病のみ。簡素茅舎の芭蕉にかくれて、自乞食の翁とよぶ。

「樽声波を打てはらわた氷る夜や涙」

芭蕉の「わぶ」についての考察

「貧山ひんざんの釜霜かまに鳴声寒シ」

買水かうみづ

「氷こほりにがくえんそ偃鼠えんそが咽のどをうるほせり」

歳暮

「暮これくれてもちを木玉こだまの侘寝わひね哉」

「窓含西嶺千秋雪／門泊東海万里船」、「泊船堂主 華桃青」とあるんですが、これはほとんど杜甫の漢詩の引き写しです。前の「寒夜の辞」と同じで、隅田川の風景をよんだ漢詩です。

「我其の句を識て、其心ヲ見ず」というのは、杜甫の句を知っているけれど、心までには至っていないと言うんですね。「その侘をはかりて」——苦しくてつらくて失意の心、それはわかってきたけれど、「其樂をしらず」、それを楽しむところまでは至っていないと言っているんです。杜甫には到底及ばないんだけど、俳諧ですから、ちょっと滑稽化して、私が勝っているのは「多病」だけだといいます。これにはまじめな反論がありません。杜甫はたくさん病氣を持っていたらしいです。だから芭蕉は間違えていると言っていますが、「自分はすごいだろう」と言っているのではなくて、到底、詩人としては杜甫には及ばないけれど、まあ病氣ぐらひは私の方がまさっているだろう、というような感じなんですね。

そして、「簡素茅舎の芭蕉」——芭蕉が植わっていますので「芭蕉庵」というのですが、「自乞食の翁とよぶ」というところまで至っています。ここで見ておきたいのは、「楽」という言葉が出てきていることです。孤独で貧しくて、そういう感懐を抱

いている中で、私はまだそれを楽しむことを知らないと言っています。「乞食の翁」、自分のことを「乞食だ」と言ったのですが「芭蕉は、有名な人ですから、旅をしたりすると、いろいろなところで迎え入れられるわけです。ところが、「都会においては、乞食行脚の身であることを忘れてはならない」とか、「それを忘れては俳諧はできない」とか言ったりしているんです。「わびの心」、それを失ってはならないことなんだと思います。

「貧山の釜霜に鳴声寒シ」——「豊山之鐘」という、中国の故事があります。豊山の鐘は霜が降りると、誰も撞かなくても鳴るので、私「豊」を「貧」にして、「鐘」を「釜」に変えているんです。私の住まいの「貧山の釜」も、霜が降りると誰も撞かなくても鳴っている、あまりの寒さに金属がキキキキキと鳴るという感じでしょうか。同じ鳴るにしても、貧しい暮しの中で金属の釜が氷って鳴る。その音に寒々しさがつつる、という句です。

次に「買水／氷にがく偃鼠が咽をうるほせり」です。元禄時代に江戸は神田上水の水道が整ったのですが、川を渡った深川には及んでいない。また、芭蕉の時代は、井戸を深く掘って、飲み水に適当な水を汲み出すほど技術が発達してませんでしたので、水を買っているわけです。いかにも貨幣経済社会の象徴みたいな、まるで現代に重なるような気がして、おもしろいなと思います。

で、芭蕉は買った水を飲んでいのですが、その水がまずく、でもそれのどを潤すしかないという句です。この「偃鼠」に

も大変いろいろな背景がありまして、これは『莊子』の中に出てくる許由の言ったことなのですが、帝王の堯が許由に「あなたに天下を譲りたい」と言うと、偃鼠―どぶねずみです、偃鼠は水を飲む時も小さなお腹を満たすだけでいいんだから、天下なんか私に必要ないと断ります。そういうエピソードから、芭蕉を「隠者の自足」ととらえる解釈もあるんです。でも、これは「満ち足りた」という感じの句ではないと思うんですね。許由には別のエピソードもありまして、「天下を譲る」と言われて、耳が汚れたということで耳を洗うとか、水を汲むのに必要な瓢さえも風に鳴る音がうるさいと捨てたとか、「無一物」というイメージがあるんです。芭蕉は、許由のように世間から離れて暮らしてはいるんですけど、世の中のことに無関心だということではなくて、その貧しさの感慨を受け止めているという風に読んだ方がいいと思うんです。買った水が凍るほどの寒い夜、その水の一片でのを潤すんですけども、決して美味ではない、その苦い水でのを潤している。そこに、日常を見定めたといい句ではないかと思うんです。ちよつと似たような芭蕉の句で、「瓶割るる夜の水の寢覚め哉」というのもあります。

「歳暮／暮れくれてもちを木玉の侘寝哉」―「暮れ」ですの
で、大晦日近く、餅をいろんな家でついているのですが、それを寝ながら、こだまのように聴いて、自分のところでは何も用意をしないという句です。江戸時代に正月を迎えるためにはどんなに貧しくても支度をします。それは、西鶴の『世間胸算用』なんかにも書かれていまして、使っている帯を紙のこよりに替えて、その帯を質屋に入れて、正月の用意をする。それを芭蕉

は、世間では最も活気付いて、正月を迎えようとしているところから独りはずれて、そのわびしさを寝ながら聴いているという、そういう感じの句ではないかと思えます。

「わび」の概念化

今まで見てきました一連の俳文―一つだけ、札状をかねた文章ははずしましたが―芭蕉が一年間に書いた俳文は、これで全て網羅されています。ここからもわかるように、芭蕉は「わび」という言葉に徹底的にこだわっているんですね。漢詩や和歌、それらを背景にして、自分も句を詠んで、「わぶ」という言葉を作り上げていこうとしている。

そうして、一年半ぐらいの検討が終わった後、『虚栗』を出すんですが、その中で「侘びと風雅」という言葉を掲げます。「風雅」というのは文学、芸術のことかと思いますが、それらを二つ並べて出している。

その中で「花にうき世」という歌仙を巻いています。発句の前に詞書がついているのですが、「憂方知酒聖／貧始覚銭神（憂へテハ方ニ酒ノ聖ヲ知り／貧シクテハ始テ銭ノ神ヲ覚ル）」―つらいことがあって酒で心を癒す、貧しくなって初めて銭のありがたみを覚るということ。花にうき世酒白く食黒し」という発句を詠みました。今までの句というのは、本当に寒い冬の中で詠んでいるのが感じられるのですが、でも、ここでは花が咲いている時期に浮かれています。「酒白く」というのはこり酒、要するに安価な酒です―江戸時代には清酒ができてい

ますので。にがり酒に、「食黒し」、つまり、あまり精米されていない黒い飯。でも、「貧しいけれど、白いにがり酒と黒い玄米は食べているんだ」という感じの句で、これはかなり大きな転換を果たしているのではないかと思います。そうして、始めの年譜で見ましたように、一六八四年に芭蕉は旅に出まして、尾張で『冬の日』の歌仙を巻くこととなります。これ以後は「わぶ」という言葉は、頻繁に出てくることはなくなくなります。自分の中で概念化し終えたという気持ちがあるのではないかと思います。

プリントの最後に、芭蕉が残した言葉を二行あげておきました。「侘わぶといふは至極しごく也。理ことわりに尽きたるもの也といへり」(わすれみづ)―芭蕉の俳論は全て聞き書きです。ここまで見てきました「侘わぶ」、貧しいとか悲しいとか孤独であるとか、そういう心ですね、それは「至極」、究極の概念だと言っているのではないかと思います。「理に尽きたる」は、「説明できないものだ」。「侘わぶ」というのは究極の概念だと言って、蕉風俳諧における「侘わぶ」の重要性を言葉にしています。

次の「侘わぶびしきを面白がるはやさしき道に入りたるかひ(甲斐)なりけらし」(『別座敷』『贈芭叟餞別辞』)―この言葉に出会ったとき私は、この言葉は芭蕉からのプレゼントだと思っただけです。「侘わぶしい」とか「貧しい」とか「つらい」ということを面白いと受け止めることができる、というんですね。悲しくてみじめでさびしくて、それを面白いということができているのは、「やさしき道」―これは文学・芸術と言いついていいと思うんですが、文学に関わったからなんだということです。文学に関わ

らなければ、「侘わぶしい」というのは、さびしくてつらいことばかりなんだけど、文学に関わった甲斐があつて、侘わぶしきを面白がることのできるということではないでしょうか。そんなことを芭蕉からのプレゼントだという風に受け止めました。今日の話を終わりといたします。

(二〇〇九年七月二日 二〇〇九年度法政大学国文学会大会)

この講演を詳述した論稿を『近世考―西鶴・近松・芭蕉・秋成』(影書房)に収めましたので、合わせてお読みいただけばさいわいです。

(ひぐらし まさ・本学教授)